

Cure to Care

第 4 話

與儀 達朗

【登場人物】第4話

町田 翼（32）： 救急・訪問診療医

鈴木 舞（30）： 訪問看護師

村井 正和（50）（48）： 訪問診療所院長

長

五十嵐 隼人（28）（26）（25）： 訪

問診療所アシスタント

金城 恵（36）： 訪問診療所アシスタント

山崎 香織（55）： 居宅ケアマネージャー

我那覇 さくら（28）： 有料老人ホーム

花の看護師

新井 亮（29）： 町田の後輩の救急医

窪田 航（44）： 五十嵐の元職場の救急医

松永 苑子（75）： 在宅患者

松永 薫（45）： 苑子の娘

黒田 直哉（55）： 在宅患者

高橋 卓也（29）： 訪問診療所医師

白井（26）： 有料老人ホーム花の看護師

赤井（32）：訪問看護師

伊藤（30）：五十嵐の元職場の看護師

松井（30）五十嵐の元職場の看護師

太田（55）：五十嵐の元職場の救急部長

阿川卓（75）：ファミレスの客

阿川夏子（70）：阿川の妻

石田達也（26）：ファミレスの客

患者A（75）：救急搬送患者

患者B（75）：救急搬送患者

釣り人（60）：河川敷の釣り人

店員（20）：ファミレス店員

【あらすじ】（第4話）

独り立ちした町田は、診療所職員金城や五十嵐とともに診療業務をこなしていく。

診療中に五十嵐が放った「俺は採血がとれません」という言葉に妙に引っかかる町田。

町田は村井や鈴木舞から、五十嵐の過去を

徐々に知っていく。

ある日、患者の急変対応を五十嵐と行う町田。五十嵐の機転の利いた行動で患者の蘇生のヒントを得ることができた町田は、偶然にも、かつての五十嵐の恩師が掛けた言葉も、彼に贈るのだった。

第4話 「コンプレックス」

○港・防波堤

快晴。海鳥の鳴き声が聞こえる。

防波堤に釣竿をもって横並びで座っている町田翼（32）と五十嵐隼人（28）。町田の竿がヒットし、リールを巻くが、獲物に逃げられてしまう。町田は悔しそうな表情を浮かべる。

町田「逃げられたな……」

五十嵐「次ですよ、次」

一旦釣竿を地面に置く町田と五十嵐。一瞬吹いた海風が体にあたり、思わず寒がる町田。五十嵐が水筒から注いだ温かいお茶を町田に手渡す。

町田「ありがとうございます。気が利くね、五十嵐くん」

五十嵐「そんなことないですよ」

町田が恥ずかしそうにしている五十嵐を軽くからかっている。再び釣竿を手に海の方をみる町田と五十嵐。

町田「全然釣れないね……」

五十嵐「ですね……今日は引き上げますか」

○五十嵐宅・居間（夜）

玄関の扉が開く音。町田が綺麗に整理整頓された居間に入り、買ってきた缶ビールを机の横に置く。

五十嵐が熱々の鍋を持ってきて、机の上の鍋敷に置き蓋を開ける。鍋の中を見て笑顔の町田。

町田「美味そう……」

五十嵐「まあ、肝心の魚は店で買いましたけどね」

缶ビールのプルタブを開けて乾杯し鍋を食べ始める町田と五十嵐。

町田が缶ビールを飲みながら直橋で鍋を突いているのに対して、五十嵐はグラスにビールを注いで飲み、取り箸を使っている。

町田「そういえば、五十嵐くんの前の職場、

救命センターだったの？」

○（回想はじめ 第3話）有料老人ホーム

花・居間（朝）

村井「町田先生は、前田救命センターで救急
医をしていたんだ」

我那覇「すごい……」

我那覇は敬服した面持ちで町田の方を
見て、視線を五十嵐に移す。

我那覇「確か隼人も救命センターいたよね？」

五十嵐「そう。でもおれは救命士で町田先生

は医者だよ……」

我那覇「そんなこと分かってるよ」

（回想終わり）

○五十嵐宅・居間（夜）

五十嵐の箸の動きが止まり、町田を見
る。

五十嵐「そうですね、どうしたんですか？」

町田「どこの救命センターだったの？」

五十嵐「県外の青葉救命センターってところで
す」

町田「青葉……。確かドクターカーが有名な
病院だったような」

五十嵐「よくご存知ですね」

缶ビールを飲み干す五十嵐。

町田「五十嵐くんも乗っていたの？」

五十嵐「ええ……。でも二年前に人手不足で運
行がストップしたんです」

町田「そうなんだ……。」

○同・台所（夜）

冷蔵庫の中を探している五十嵐。

五十嵐「先生、締めは麺とかでいいですか？」

○同・居間（夜）

町田「大丈夫、ありがとう」

五十嵐に二つ返事で答える町田。綺麗
に整理・整頓された机の上には、数多
くの医学書や看護学書などが揃って並

でいる。机の上に飾られている

一枚の写真が目に残まる。写真にはドクターカーのユニフォームを着ている五十嵐隼人（25）と窪田航（44）が二人笑顔で写っている。

居間に戻ってきた五十嵐は町田が写真をみている事に気付く。

五十嵐「窪田先生っていう、僕にいろいろと教えてくれた人です」

町田「そうなんだ……今はどうしているの？」

五十嵐「二年前に救命センターを辞めて、地元に戻りました」

町田「二年前？」

五十嵐「そうです。ドクターカーは窪田先生を中心にやっていて、他の医師の退職も重なって運行が止まって……」

黙って五十嵐の話を聞いていた町田は、写真の方にもう一度目をやる。

○村井訪問診療所・外観（朝）

村井訪問診療所の看板が立っている。

○村井訪問診療所・オフィス（朝）

村井正和（50）が椅子に座っている。

出勤した町田がオフィスに入ってくる。

町田「おはようございます」

村井「おはよう」

出勤した金城恵（36）と五十嵐もオ

フィスに入ってくる。

村井「町田先生、ちよっときてくれる？」

町田「はい」

町田は席を立ち上がり、村井のデスク

の前に移動する。

村井「土日は休めた？」

町田「おかげさまで。久々の連休でした」

村井「そうか、よかった」

村井はうなずき、デスクの引き出しか

ら名札を取り出して町田に手渡す。

村井「これ渡すのを忘れていた。今日から独

り立ちだよね、頑張ってる」

名札を受け取りうなずく町田。名札をみると「村井訪問診療所 医師 町田翼」とポップな字体で書かれている。軽く笑いながら村井を見る町田。

町田「金城さんのやつもそうだったんですけど、うちの名札って何か女子高生が書いた感じですね」

村井「……そうか？」

表情全体は穏やかに笑っている様だが目元だけは無表情に見える村井。

○同・オフィス（朝）

村井が一日のスケジュールを町田、金城、五十嵐の三人に向けて説明している。真剣に聞いている三人。

村井「今日は町田先生には金城さん、僕は五十嵐くんのペアでいきましょう」

村井をみてうなずく町田、金城、五十嵐の三人。

○車内・後部座席（朝）

金城が運転している。後部座席でノートパソコンを開いてやや緊張な面持ちで電子カルテを見ている町田。バックミラーで町田の方を見る金城。

金城「緊張している？」

町田「まあ今日から独り立ちなんで……」

○車・外観（朝）

赤信号で停車する車。

○車内・後部座席（朝）

金城が診療バッグから封筒を取り出し、後部座席の町田に手渡す。町田が封筒を見る。表面には「村井訪問診療所」町田翼 先生」裏面には「金田京子」と書かれてある。

○（回想はじめ 第3話）金田宅・居間

町田「京子さん、鼻の管を入れるという決断

は本当に辛かったと思います」

涙を流し始める京子。

町田「でも、お母さんにはもう必要ないんじゃないですか？」

○集合写真

胃管が抜かれた和子。京子、ショートケーキを持った莉子、舞、町田が笑顔で写っている。

（回想終わり）

町田「これって……」

金城「開けてみたら？」

町田が封筒を開けて一通の手紙を取り出す。手紙には町田へ向けた感謝の言葉が綴ってある。文面をみて緊張の面持ちが徐々に和らいでいく。

金城がバックミラーで町田の様子を見ている。

○黒田宅・居間（朝）

車椅子にだるそうに座っている黒田直哉（55）。やや心配そうな表情を浮かべて黒田の体温を測っている金城。

町田「村井先生から引き継ぎとなりました

町田です、宜しく願います」

黒田が町田の方を見る。

黒田「村井先生に比べて若いな……まあ宜しく頼むわ……」

体温計の音が鳴り「38度5分」と表記されている。

金城「黒田さん、だるそうにしていたけど熱あるじゃない」

町田「何か症状ありますか？」

黒田「まあ腰が少し痛い気はするかな」

町田が黒田の腰を診察している。

町田「もしかしたらおしっここの感染症かもしれません。念のために血液検査と尿検査をしましょう」

黒田がやや苦い表情で町田を見る。

町田が柔らかい表情で黒田の肩に手を置く。

町田「主治医として黒田さんの体を思っていることです」

黒田「わかったよ」

町田はうなずき金城の方に目をやる。

町田「金城さん、採血と尿検査お願いしていますか？」

金城がうなずく。立って金城の元へ歩み寄る町田。

町田「検査結果と状態次第で、特指示で抗生物質の投与も考えています」

金城「いいんじゃない」

町田を感心したような表情で見る金城。

○村井訪問診療所・オフィス（夕）

診療を終えてオフィスへ入ってくる町田と金城の二人。すでに戻っていた村井と五十嵐が席について、書類仕事をしている。

金城「ただいま」

五十嵐「おかえりなさい」

村井が席に着こうとしている町田の方
を見る。

村井「どうだった、独り立ちの初日は？」

町田「緊張しましたけど、何とかって感じでした」

金城「町田先生、しっかりしていて初日とは

全然思わなかった」

村井「すごいじゃん、町田先生」

町田「金城さん、褒めすぎですよ」

恥ずかしい表情を浮かべる町田。

村井「明日は逆のペアで行ってみようか」

五十嵐が町田先生の方を見る。

五十嵐「町田先生、宜しくお願ひします」

町田「五十嵐くん、よろしく」

○松永宅・玄関先（朝）

晴れ模様の空。蜂が玄関先の花に止ま
っている。玄関先に立っている町田と

五十嵐。町田が玄関前のインターホンを押す。

町田「村井訪問診療所です」

松永薫（４５）（声）「どうぞ」

玄関の扉を開ける町田。玄関には何足か靴が置かれている。玄関に現れるマスキ姿の松永薫。

町田「はじめまして、村井訪問診療所から来ました医師の町田と申します」

五十嵐「アシスタントの五十嵐です」

薫「お待ちしていました」

軽く会釈し、家の中に入る町田と五十嵐の二人。

○同・居間（朝）

居間には机と椅子があり、在宅患者の松永苑子（７５）、居宅ケアマネージャーの山崎香織（５５）が座っている。

町田に気付く山崎。

山崎「あら町田先生、久しぶり」

町田は山崎の方へ思わず目をやる。

町田「お久しぶりです、山崎さん」

山崎がじっと町田の目を見ている。

思わず目を逸らす町田。

苑子「知り合いなの？」

山崎「ええ。この世界は本当に狭いですよね」

苑子を見て、山崎がにっこり笑う。

苑子が頷く。

薫に促されて席に座る町田、五十嵐。

町田「村井訪問診療所から来ました主治医の

町田翼です」

苑子に向かって会釈する町田。苑子も

町田をみて会釈する。

町田「さっそくですが、苑子さんは膝が痛く

て通院が困難——」

苑子、薫、山崎と会話している町田。

一旦会話が終わる。

町田「苑子さんは、何とか庭の園芸をしたい。

でも寝たきりになったら、延命はしたくな

いということですね」

苑子「人生会議ってやつね、懐かしいわ」

山崎が町田の発言に感心した表情を浮かべている。町田は前医からの手書きの診療情報提供書を見るが、走り書きで解読が困難とわかると顔を曇らせる。

町田「そういえば、前のお医者さんからもらった薬ってありますか？」

苑子「痛み止めと、なんかあったけ？」

薫「痛み止めと血圧の薬くらいよね」

町田「何かアレルギーとかはありますか？」

苑子「アレルギーはないけど……」

口を覆って咳をしている薫は市販の解熱鎮痛薬の錠剤を取り出し、さっと水で飲んでいる。町田は電子カルテの画面を見ており気づいていない。

薫「母が昔喘息を起こしたことがあって、その時に痛み止めに注意してくださいって」

町田「そうなんですネ」

○同・玄関先（朝）

晴れ模様だった空は曇りがかっている。

町田と五十嵐、山崎が玄関先に立っている。

町田「お邪魔しました、これから宜しくお願
いします」

玄関先に足早に現れる訪問看護師の赤
井（32）。

赤井「すみません、遅れました」

山崎「急患対応大丈夫だったの？」

赤井「なんとか」

山崎が立っている町田と五十嵐の二人
を手のひらで指し示す。

山崎「主治医の町田先生、救命士でアシスタ
ントの五十嵐さんよ」

赤井をみて会釈する町田と五十嵐の二
人。赤井も町田と五十嵐の方に軽く会
釈し、薫の方をみて頭を下げる。

赤井「すみません、遅れてしまって。訪問看
護師の赤井です」

薫「いえいえ、どうぞ」

薫は赤井を中に招き入れる。

○車・外観（朝）

後部座席の扉を開けて車に乗り込もうとする町田だが、ふと何かを思ったのか五十嵐に声をかける。

町田「あ、忘れていた。痛み止めの調整のために一応採血取っておこうかな……」

五十嵐「さっきの訪問看護師の方にお願ひしてきますね」

町田「ごめんね、五十嵐くん」

五十嵐は診療バッグから採血スピッツを取り出して玄関先に向かっていく。

○松永宅・玄関（朝）

玄関を開ける五十嵐。居間から赤井が現れる。玄関の上り框を境に、向かい合っている五十嵐と赤井。

赤井「どうしました？」

五十嵐「すいません、さっき採血忘れていて。

お願いできますか？」

採血スピッツを赤井に見せる五十嵐。

五十嵐が手にしている採血スピッツを

見る赤井。

赤井「いいですよ」

五十嵐から採血スピッツを受け取る赤

井。

五十嵐「ありがとうございます。あと苑子さ

ん何か喘息の既往があるみたいでー」

赤井「情報ありがとうございます。あとで聞いとくわ、

看護師としてね」

赤井は五十嵐の会話を遮り、居間に戻

る素振りを見せるが、一瞬立ち止まっ

て玄関の五十嵐の方を見る。

赤井「そういえば五十嵐さんは救命士だから

採血できないんですよね」

五十嵐の表情が曇る。

○（回想はじめ 二年前）青葉救命センター

五十嵐が浮かかない表情をして立っ

る。五十嵐の前には、救命センター看
護師の伊藤（30）と松井（30）が
立っている。伊藤と松井の口元からは
五十嵐に何か言葉をかけている。

（回想終わり）

○車・外観（朝）

浮かない表情で戻ってくる五十嵐。

町田が声をかける。

町田「どうだった？」

五十嵐「頼めました……」

五十嵐の表情を訝しく思う町田。

町田「なんかあったの？」

町田の顔を見る五十嵐。

五十嵐「町田先生、僕は採血が取れません、

すみません……」

町田は、五十嵐の唐突な発言に驚くが

五十嵐の目の奥に何か抱えているもの
を感じ取る。

町田「どうしたの、五十嵐くん？」

五十嵐「いや何でもありません、次いきましよう」

五十嵐が運転席のドアを開けて車に乗り込む。腑に落ちない表情で後部座席のドアを開けて車に乗り込む町田。

○村井訪問診療所・オフィス（夕）

町田が書類仕事を終えて席を立つ。
座って作業をしている村井に声をかける。

町田「院長、お疲れ様でした」

村井「お疲れ様」

既に帰宅している五十嵐の席を見つめている町田。

町田「院長ちょっといいですか？」

書類に目をやっていた村井は顔をあげて町田を見る。

○同・応接室（夕）

窓から西陽が差し込んでいる。

応接室のソファ―に座っている町田。
コーヒ―を淹れてきた村井は、ソファ
―に座って町田の前にコーヒ―を置く。
村井を見て軽く会釈する町田。

村井「町田先生、どうかした？」

町田「実は……ちょっと伺いたい事があって」

村井「診療のこと？」

町田「いや五十嵐くんのこと……」

村井「五十嵐くん？」

町田「実は……」

何やら話している町田と村井。

村井「五十嵐くんがそんな事言っていたんだ」

町田「あの時の五十嵐くんの目が、何かを抱

えているような気がして……」

町田「院長は五十嵐くんの過去何か知ってい
ますか？」

村井が立ち上がって窓の方を見ている。

村井「僕も彼の過去は知らない。まあ、初め
ての出会いはファミレスだったけどね」

町田「ファミレス？」

村井「そう二年前かな……」

○五十嵐宅・居間（夕）

帰ってきた五十嵐が、机の上に置かれた窪田と映っている写真を手に取る。

○（回想はじめ 三年前）青葉救命センター

I・カンファレンス室（朝）

T「三年前」

救命部長の太田（55）と緊張した面持ちで横に立っている五十嵐隼人（25）。太田が椅子に座って電子カルテを見ている窪田航（44）に声をかける。

太田「窪田先生」

窪田「どうしました部長？」

横の五十嵐を手のひらで示す太田。

太田「今日から院内救命士として来てくれた五十嵐くん。彼ドクターカーに興味あってね。いろいろ教えてあげてもらっていい？」

五十嵐「五十嵐隼人です、宜しくお願いします」

窪田に深く頭を下げる五十嵐。

窪田が五十嵐の姿を見ている。

○同・廊下

歩いてくる窪田に五十嵐が声をかける。

五十嵐「窪田先生、宜しくお願いします」

五十嵐「ドクターカーは医師や看護師さんと

一緒に働ける貴重な機会なので、医学的な

こと色々と教えてください」

窪田「教えてください？」

窪田「最初に言っとくが、俺は受け身のやつ

が嫌いだ」

厳しい表情で五十嵐を見て、去ってい

く窪田。窪田の後ろ姿を見ている五十

嵐。

○救急車・車内

窪田が心肺停止の患者A（75）に換

気を実施しながら、静脈路確保中の五十嵐に何か指示を出している。五十嵐は静脈路確保を断念して、焦った表情をしながら救急バッグの中を探しているが、探しているものは見つからない。その様子を険しい表情で見ている窪田。

○公立図書館・自習室

薬学や救急に関する医学書が机の上に積み上がっている。ノートにまとめている五十嵐。

○青葉救命センター・カンファレンス室（夜）

点滴のシミュレーターを使いながら静脈路確保の練習をしている五十嵐。ドアの外からその姿を窪田が見ているがうまくいかない様子を見て、窪田が部屋に入ってくる。驚いた表情を見せる五十嵐に、静脈路確保の指導を始める窪田。

○救急車・車内

心肺停止の患者B（75）に挿管を完了して足元を見ている窪田。静脈路確保に難渋している五十嵐。曇った表情で下を向いた窪田だったが、視界に骨髄針が入る。骨髄針を持っている五十嵐が立っている。窪田はうなずき、骨髄針を受け取り患者の足元にまわる。足元には既に薬剤や静脈路のセットが準備されている。窪田は感心した表情を浮かべながら頭側で換気をしている。五十嵐に目をやる。

○青葉救命センター・廊下

廊下を歩いている五十嵐隼人（25）。

伊藤と松井が立ち話をしている。

伊藤「窪田先生、やめるらしいよ」

廊下の角で立ち止まる五十嵐。

松井「それやばくない？」

伊藤「他にも退職者出るらしいからドクターカー運行できなくなるかもって」

松井「院内救命士とかどうなるんだろうね？」

伊藤「ドクターカー無かったらほぼ仕事ないんじゃない？」

意地悪そうな表情を浮かべて笑っている松井と伊藤。黙って二人の会話を聞いている五十嵐。

○青葉救命センター・初療室

歩いている五十嵐。正面から、伊藤と

松井が歩いてやってくる。

伊藤「五十嵐くん」

五十嵐「はい？」

松井「これ患者家族に説明しておいて」

五十嵐に入院患者用のパンフレットの束を渡す松井。

五十嵐「こんなに……」

伊藤「あと経過ベッドのシート交換もお願いね」

表情が曇っている五十嵐。

松井「なんか言いたいいことあるの？」

五十嵐「これ僕がやるんですか……」

伊藤「じゃあ、五十嵐くんは採血と点滴とか取れるの？」

伊藤と松井が意地悪そうな表情を浮かべて、顔を見合わせる。

五十嵐「できないです……」

伊藤「五十嵐くん、救命士だもんね」

松井「私たちは五十嵐くんに仕事見つけてあげているの」

伊藤「ちゃんとやってね」

伊藤と松井が去っていく。

○青葉救命センター・部長室

退職届を太田に手渡す五十嵐。太田は驚いた表情をみせるが、五十嵐は太田に頭を下げて、部長室を出ていく。

○商店街・アーケード（夕）

ファミレスの看板を見つけ、中へ入っていく五十嵐。

（回想終わり）

○有料老人ホーム花・居間

洗い場で物品を洗っている施設看護師の我那覇さくら（28）。横に町田が立っている。

我那覇「五十嵐くんのことですか？」

町田「前の救命センターのこととか……」

我那覇「五十嵐くん、高校卒業してからは県外に出ていたから、私も分からないですね」

町田「そうなんだ……」

洗い物の手を止める我那覇。

我那覇「ただあの人なら分かるかもしれない」

町田「あの人？」

我那覇「五十嵐くんが二年前、こっちに帰ってきた時くらいですかね……確か訪問看護

師の鈴木……」

町田「鈴木舞？」

我那覇「そうです、その人です」

我那覇「確か訪問診療について色々習っているとか言っていましたよ」

施設看護師の白井（26）が浮かない表情をしながら、保留中の子機を片手に我那覇に近づいてくる。

白井「我那覇さん、高橋先生が往診いららないんじゃないかって……」

我那覇「また？ 代わるわ」

我那覇が洗い物の手を止めて、少し不満そうな表情をしながら白井から子機を受け取る。

我那覇「もしかしたら五十嵐くんの過去とか知っているかもしれません」

町田「ありがとう」

町田に軽く会釈して、白井と一緒にその場を離れる我那覇。

○居酒屋・カウンター（夜）

町田と訪問看護師の鈴木舞（30）が

横並びで座っている。舞の前にはノンアルコールビールの瓶が置かれている。

舞「五十嵐くんの過去？」

町田「鈴木なら何か知っているかなと思って」

舞「彼が訪問診療のアシスタント始めたのが大体二年前だったと思うけど……訪問看護の仕組みとか勉強しても分からないことあるから教えてくださいって」

舞「訪問看護とアシスタントってお互いの仕事がある程度分かっているといけないうね」

町田「なんでまた鈴木？」

舞「金城さんは子供のことで早く帰らないといけなかったり、他の看護師は冷たかったって。まあ年が近くて聞きやすかったのもあるとは思いますが」

舞がお通しに手をつけている。

舞「ある日飲みに行ったんだけど、五十嵐くん、酔っ払っていて愚痴こぼしていた」

舞「前の職場の看護師さんに、採血や点滴が

できないからって嫌がらせ受けたって……」

町田「そうだったんだ……」

机の上に置いていた舞のスマホに着信の表示がされる。

舞「電話でてくる」

居酒屋の外に出ていく舞。町田がジョッキに入っている生ビールを何とも言えない表情で飲んでいる。足早に外から戻ってくる舞。

舞「ごめん、呼ばれちゃった」

舞がカバンから財布を取り出してお金を出そうとするが、それを制する町田。

町田「いいよ、頑張って」

舞「ごめんね、ありがとう」

舞が荷物を持って外に出ていく。
何か考えている表情をしている町田。

○黒田宅・居間（朝）

淡々と黒田の体温や血圧を測定する五
十嵐。町田の方をみる黒田。

黒田「おかげで良くなったよ、先生ありがとう
うな」

町田「よかったです、お薬ってどれくらい残
っていましたたっけ？」

黒田「薬？　ちょっと待ってな……」

車椅子を移動させようとする黒田。

五十嵐「これですかね？」

黒田に薬の入った袋を見せる五十嵐。

黒田「そう、それ」

黒田に代わって、既に机の上に残薬を
出して数えはじめる五十嵐。

黒田「サンキュー、助かるわ」

五十嵐の姿を見ている町田。

○車内・後部座席

五十嵐が車を運転している。後部座席
に座っている町田。バックミラーで

町田の姿を見る五十嵐。

五十嵐「町田先生、お昼ですけどどうしま
す？」

しばらく考えている町田。

町田「弁当買って、どっか見晴らし良い所で食べるのとかどう？」

町田の意外な申し出に驚く五十嵐。

五十嵐「いつも定食屋だと思っていました」

町田「たまにはいいかなって」

町田は軽く笑いながら運転席の五十嵐を見る。

○河川敷・堤防

堤防に座って弁当を食べている町田と五十嵐の二人。釣り人（60）が何かを釣って喜んでいいる。その光景を見ている町田と五十嵐の二人。

町田「なんか釣れているね」

五十嵐「ですね」

町田「なんかコツとかあるのかな……」

五十嵐「コツですか？魚への関心じゃないですか？」

五十嵐を軽くからかう町田。

釣り談義で盛り上がっている町田と五

十嵐の二人。会話が一旦終わり、五十

嵐の目を真剣な表情で見る町田。

町田「五十嵐くん、青葉救命センターで点滴

や採血ができないからって看護師に嫌がら

せ受けたんだって？」

五十嵐「どうしてそれを？」

町田「鈴木から聞いた」

五十嵐「舞さん……」

五十嵐が少し恥ずかしそうな顔をして

下を向いている。

町田「院長に初めて出会った時のこと覚えて

いる？」

（回想はじめ 二年前）○商店街・アーケード

ド（夕）

T「二年前」

ファミレスの看板を見つけ、中へ入っ

ていく五十嵐隼人（26）。

○商店街・ファミレス店内（夕）

五十嵐がメニューを見ている。隣の席で大きな物音が鳴り、思わず目をやる五十嵐。阿川卓（75）が仰向けに倒れている。客の石田達也（26）が急いで駆け寄る。

石田「お客さん、大丈夫ですか？」

卓の意識と呼吸を確認して、心肺停止だと気づく石田。

石田「心停止です、誰か来てください！」

石田はすぐに心臓マッサージを始める。

村井正和（48）が横に現れる。

村井「医者の方村井です、状況は？」

石田「研修医の石田です、心停止です」

懸命に心臓マッサージを続けている石田。村井がフロアを見渡す。店員（20）と目があう。

村井「私が119番をします。AEDをお願いします」

店員はうなずき、店外へ出ていく。

心臓マッサージを受けている姿を見て
狼狽している妻の阿川夏子（70）。
心臓マッサージをされている夫に駆け
よって体を触る。

夏子「あなた、あなた！夫は助かるんです
か？」

石田の心臓マッサージを続けている手
を掴む

石田「蘇生中です、離れてください！」

夏子の手を引き剥がす石田。引き剥が
された夏子の手を取って優しくその場
から遠ざける五十嵐。

五十嵐「救命士の五十嵐と言います。安心し
てください、旦那さんを助けるために懸命
な処置をしています」

五十嵐「処置には旦那さんの体に触れていて
はできないこともあります。大丈夫ですよ、
もうすぐ救急隊が来てくれます」

電話をかけている村井が五十嵐の姿を
見ている。

（回想終わり）

○河川敷・堤防

座っている町田と五十嵐の後ろ姿。

町田のスマホに着信がなる。電話に出る町田。

赤井（声）「町田先生、すぐ来て欲しいです。

園子さんが……」

町田「わかった、すぐ行きます」

町田「五十嵐くん」

町田の表情をみてうなづく五十嵐。

○松永宅・居間

居間に足早に入ってくる町田と五十嵐。

焦った表情を浮かべている看護師の赤

井。町田が声をかける。

町田「赤井さん、どうしました？」

赤井「苑子さんが、市販の痛み止めを飲んだみたいだけど、苦しいって連絡があって」

ベッドには喘鳴を伴って苦しそうに息

をしている苑子が横たわっている。

五十嵐が机の上に置いていた市販の解熱鎮痛薬の箱を持ってくる。箱の成分を見る町田。

町田「アスピリン喘息……」

苑子の上着を開ける。胸や腹に蕁麻疹が広がっている。苑子の手を握って脈を確かめる町田。

町田「アナフィラキシーショックか。赤井さん、アナフィラキシーショックで119番をお願いします」

赤井がうなずいて電話をかけ始める。町田の視界に針が付いたアドレナリンのシリンジが入る。五十嵐は町田を見てうなずき、町田は受け取る。苑子の太ももに筋注する町田。

○大通り・車道

サイレンを鳴らして緊急走行している救急車。

○松永宅・居間

静脈路を確保し、患者の容態を確認している町田だが、良くなっていないことに表情を曇らせる。

五十嵐「どうですか？」

町田「患者の状態が上がってきてない……」

五十嵐が何かを思いついた様に、赤井に声をかける。

五十嵐「患者の持参薬ってどこにありますか？」

赤井「え、こっちよ……」

指し示された棚を探し始める五十嵐。そこにドクターカーのユニフォームを来た新井亮（29）が現れる。町田の姿を見て驚く新井。

新井「町田先輩」

町田「新井、アドレナリンを打ったが状態が上がってこない」

町田の視界に降圧薬の袋を持った五十

嵐が現れる。

五十嵐「もしかしたらこれかも」

町田「ベータブロッカー……」

新井を見る町田。新井がうなづく。

新井が無線に向かって喋り掛ける。

新井「こちら、ドクターカー新井。グルカゴ

ンの準備をお願いします」

○松永宅・玄関先

五十嵐「町田先生の処置や判断の速さ、在宅で救急外来やっているみたいでした」

町田「五十嵐くんのおかげだよ。ましてアナフィラキシーとベータブロッカーの関係を知っているなんて驚いた。相当勉強してないとわからない」

救急車に乗りこむ新井。後の扉が閉まって車が出発する。救急車を見送る町田と五十嵐の後ろ姿。

（回想はじめ 二年前）○商店街・アーケード

ド（夕）

救急車に乗りこむ石田。後の扉が閉まって車が出発する。救急車を見送る五十嵐と村井の後ろ姿。

村井「患者は電気ショックが必要な状態だった。君が奥さんのケアをしてくれて本当に助かったよ」

村井の方を見る五十嵐。

村井「訪問診療所の医師の村井といます」
五十嵐に名刺を手渡す村井。名刺を受け取る五十嵐。

五十嵐「救命士の五十嵐です」

村井「救命士なんだね。今はどこで？」

五十嵐「前働いていたところやめて、職探し中です」

村井「そうなんだ……」

一息ついて、再度五十嵐の方を見る。

村井「よかったらアシスタントとして働いてみない？」

急な申し出に驚いた表情を見せる五十嵐。

五十嵐「冗談ですよね？　だって僕は採血も点滴も取れないですよ？」

五十嵐の発言に、軽く笑う村井。

村井「大事なことって点滴や採血じゃないよ。大事なのは幅広い視野かな、今日の家族対応みたいだね」

村井「よければ、見学にでも来てよ」

五十嵐の左肩を叩いて去っていく村井。
村井の後ろ姿を見ている五十嵐。

（回想終わり）

○松永宅・玄関先

救急車が去った通りに横並びで立っている町田と五十嵐の二人。

町田「五十嵐くんは自分の良さって何だと思
う？」

五十嵐「自分の良さですか？」

下を向いて考えている五十嵐。

(回想はじめ 二年半前) ○青葉救命センタ

ー・屋上

屋上に立っている窪田。屋上のドアを

開けて入ってくる五十嵐。

五十嵐「窪田先生」

窪田「五十嵐」

五十嵐に缶コーヒーを渡し、窪田と五

十嵐はベンチに座る。

窪田「もうすぐ半年か、ドクターカー乗って。

正直どう？」

五十嵐「徐々には慣れてきましたけど……点

滴取るのは一度も成功した事ないです」

下を向いている五十嵐を見て窪田が軽

く笑うが、真剣な表情に戻る。

窪田「もう太田部長には伝えてるんだけど、

家庭の事情で俺は来月退職する」

驚いた表情を見せる五十嵐。

窪田「近いうち俺以外にも退職者がいる……。

ドクターカーの運行が厳しくなるかもしれ

ない」

下を向いている五十嵐。

窪田「なあ、五十嵐。お前は自分の良さって

何だと思う？」

五十嵐「僕の良さですか？」

しばらく考えている五十嵐。

窪田が立ち上がって数歩前に歩き出す。

窪田「俺は、お前が努力家で気が利いていて、

広い視野を持っているところだと思う」

五十嵐「窪田先生……」

窪田「まあ俺が辞めても、将来必ずお前の良

さを分かってくくれる人がいる」

窪田は五十嵐の左肩を叩いて去ってい

く。

（回想終わり）

○松永宅・玄関先

五十嵐の左肩を叩く町田。

町田「五十嵐くんの良いところは、努力家で

気が利いていて広い視野を持っていると

ころだと思う」

五十嵐「町田先生……」

五十嵐が下を向いて涙を流している。

その姿を優しそうな表情で見ている町田。

○レストラン・玄関先

玄関先に出てくる町田と新井。新井は満腹の笑みを浮かべている。

新井「先輩、ごちそうさまでした。また休みあえば、飯行きましようね」

町田「新井食べ過ぎだよ」

苦笑いの町田。

高橋「新井？」

声の方を振り向く町田と新井。

ブランド物に身を包んだ大柄な高橋卓也（29）が立っている。

新井「高橋じゃん、久しぶり」

驚いた表情をしている新井。

町田「新井の知り合い？」

小声で新井に囁く町田。

新井「俺の初期研修の同期ですよ」

町田「そうなんだ……」

新井「あれ、高橋って俺と同じ救急専攻医じゃなかった？」

高橋「今はもう違うよ」

高橋が新井の隣にいる町田へ視線を

向ける。新井が視線に気付く。

新井「俺の先輩の救急医で町田先生。今は訪問診療をしている」

町田の方を見て、軽く会釈して名刺を

取り出して町田に手渡す。名刺を受け

取る町田。

高橋「奇遇ですね」

高橋「はじめまして、町田先生。訪問診療医の高橋卓也です」

町田が高橋の顔を見る。高橋と町田が

向き合っている。

（第5話「経験」へ続く）

